

■絵島 大奥女中。7代将軍徳川家継の生母に仕え、権力闘争のなか、風紀の乱れの象徴として粛清された。

えじま

護国寺・・・1681=

生。江島とも書く。出自については諸説がある。①三河国刈谷の生れで吉原の遊女とたっていたのを、小普請組の白井平右衛門が落籍したもの、②白井の妹、③江戸の生れで、堺町の市村竹之丞座の看板叩きである達摩三郎兵衛の娘、名は初音、④大和国郡山の生れで、父は江島徳兵衛など。

堀田正俊暗殺1684= 3歳 :

湯島聖堂・・・1690= 9歳 :

生類憐令頂点1695=14歳 :

・・・・・・1699=18歳 :

はじめ和歌山藩主徳川綱教の簾中鶴姫に仕えていたが、

江戸っ子拘束・1708=27歳 :

徳川綱吉没・1709=28歳 :

鶴姫が没したので、次に桜田邸の*徳川家宣の愛妾おきよの方(左京)に仕えた。この年、家宣が将軍世嗣となり、江戸城本丸に移ったので、絵島もおきよの方に従った。おきよの方は世子鍋松(家継)を生む。絵島はおきよの方に気に入られて重く用いられ、年寄に昇進し、女中289人、下女1000人を統轄し、大奥において並びなき権勢を振う。

乾山陶器店・1712=31歳 :

*鍋松が3歳で将軍職に就くと、おきよの方は24歳で落飾し、月光院と称した。絵島は、600石を給せられ、容貌才覚ともすぐれていたが、生来驕慢で、専横の振舞いが多かったとも伝える。

和漢三才図絵1713=32歳 :

*絵島の芝居見物は、この年の山村座が最初とされる。浅草諏訪町の商人柄屋(都賀屋)善六と出羽屋源七が大奥の御用達になろうとして、奥医師奥山交竹院および小普請奉行金井六左衛門を通じて絵島に近づくため、他の女中4人とともに芝居に招待したのである。その後も金井六左衛門の誘いで山村座で観劇し、座付作者中村清五郎を介して人気役者の生島新五郎をはじめ三条助太郎、沢村玉弥を招き、のち山村座から座元長太夫の自宅に席を移して酒宴を開いた。このころから生島新五郎と関係していたとされている。

絵島事件・・・1714=33歳 :

*事件に直接つながる観劇は、家宣の命日に、月光院の名代として芝増上寺に代参をし、その帰りに山村座に乗り込んだ。随行の女中、侍などを含め130余人で、絵島らは棧敷で簾をたらし酒宴をはじめ、座元長太夫、生島新五郎、座付作者中村清五郎らが呼ばれて酒の相手をつとめた。他の客の迷惑もかえりみぬ振舞いがあり、徒目付らが注意したが改めようとせず、逆に権柄づくで叱りつけた。この芝居見物はやがて市中の評判となり、幕府も捨て置かず吟味に乗り出した。そこで大奥女中たちが使に出たり宿下りすることにかこつけて役者たちと馴染みを重ねていることが露頭し、処罰が言い渡され、絵島は信濃国高遠に流罪と決まった。白無垢に素足という姿で不浄門の平川門から追放され、白井平右衛門にとりあえずお預けとなり、山村座に見物に行った女中300余人も親類預けなどの処分をうけた。また座元長太夫は大島、生島新五郎は三宅島、清五郎は神津島へ流罪、白井平右衛門と水戸家徒頭奥山喜内は死罪、奥医師交竹院は流罪と決まり、関係者は1500人に及んだ。絵島は内評議では死罪と決まっていたが、月光院が圧力をかけ、死1等を減じて流刑にしたといわれる。世にいう「絵島・生島事件」であり、大奥の風紀の乱れの象徴として取上げられ、また悲恋物語として脚色されている。しかしこの事件の背景には、幼將軍を擁して権勢を振っていた月光院と側用人間部詮房に対する幕閣中枢の反感があり、絵島はこの権力争いの犠牲になったとする見方が有力である。絵島は取調べの最後まで生島との情交を否定している。絵島は「浮世にはまた帰らぬや武蔵野の月の光りの影もはづかし」と詠み、58人の付人に守られ、高遠に着き、城下から離れた非持村平栗に囲われていたが、

徳川吉宗将軍1716=35歳 :

隅田川の桜・1717=36歳 :

・・・・・・1719=38歳 : 花畑に移され、

懐徳堂公認・1726=45歳 :

昆陽蕃諸考・1735=54歳 :

「囲屋敷から出ることなく、衣類は木綿に限られ、一汁一菜の食事をとり、27年を過して、没した。

・・・・・・1741=60歳 :